土岐文庫
文庫17
W217
2

早稲田大学図書

紅毛雜話巻之二

東都　森嶋中良　編輯

○鳳凰の説

中川淳庵の考に曰。蛮語に鶏の雌を「ウーン」雄を「ハーン」といふ。鳳凰のことは漢人の音に叶へり。「ヨヒストレ」と云書の名に印帝亜の鶏として図をのせたり。和漢の画に写す所の鳳凰なり。唐土の聖代に来儀せしといふも。かゝる西方まで王化に服して。方物を献ぜしと云なるべしと

昭和六十年二月一日　善磨氏寄贈
010185195339

なり。其全図等ハ龍紀和蘭某選に委し他日刊行の時御覧あるべし。

○弗尼思（フニス）

「フーニス」ハ鳥の名。明人の翻する所に火鳥と訳す。此鳥四五百歳にして死せんとする時其絶（はて）る日を知り。香木（かうぼく）を積重ねて其の上に立。天気甚熱き日に向ひて尾を揺（うご）かして火を起し。自ら火中に焚死（やけし）ぬ。其灰変じて一ツの虫となり。その虫化して鳥となる。故に天下に唯一羽の鳥のみ。西洋の諸かきたる物に「フーニス」といふ書あり。「ヨンストンス」が説の虫書にもあり。実ハ寓言（ぐうげん）のよし也。

○都児格（トルコ）

都児格の都を「コンスタンチノポル」といふ。三角なる地を別けるとなり。「イタリヤ」国の名の里数にて十五里あるとなん。日本里数にて凡三十里に当る。

○飛龍頭（ひりうづ）

此邦にて云。油揚の飛龍頭ハ「ポルトガル」国の名の食物なり。其製左のごとし。ひりうづハ彼国の語のよしなり。

粳米粉（うるのこ）　糯米粉（もちのこ）　各七合

右あわせて煉合せ。申で上て油揚にすることなり。

○天鵞絨（びろうど）

びろうどやうのものハ「マレイス」国名の語なり。紅毛にてハ「フルウール」といふとぞ。以上の四説ハ雲汲子の物語なり。

○霊鷲山(りやうじゆせん) 附 釈迦如来の傳

印帝亜国に錫蘭(せいらん)といへる嶋の中央に「アダムス」といふ高山あり。其高さ凡二十里。仏家に（印帝亜ハいはゆる天竺なり）所謂(いはゆる)霊鷲山(りやうじゆせん)是なり。麓より巓(いたゞき)まで十二層(ぢう)の山道を攀躋(よぢのぼり)道路はなはだ嶮岨なる故。鉄鎖(てつくさり)を設(まう)けて取附(とりつけ)すがり此山の者の労(つかれ)を助く。頂に泉あり。其水別れて山中を周(めぐ)り。山下に落合て一の河となる。毎年(まいとし)「レテガンシケン」といふ。三月(さんぐわつ)初旬(しよじゆん)より山へ入ずは

あらず。此山の行者は河水に浸(ひた)り。諸の悪事(あくじ)を懺悔(さんげ)して垢離(こり)をとり。山上へ登るなり。山口よりちかきに当る石坂の右の方に。自然石(じねんせき)を柱とし。其上に長き石を横にわたし。一の鳧鐘(つりがね)をつりたり。昔時(むかし)仏祖(ぶつそ)の造(つく)りたるものなりと云傳ふ。祇園(ぎおん)精舎(しやうじや)の鐘なるよし。又大なる撞木(しゆもく)を釣(つる)。華の引綱(つな)を下より登山の者信心をためしとして十撞を撞くに。罪障(ざいしやう)消滅(せうめつ)せざる者は縄(なは)て音を発(はつ)せず。志ある時は山上へのぼることかなはずして夜より下山し。他日改て登山するとなり。扨麓(ふもと)より巓(いたゞき)に

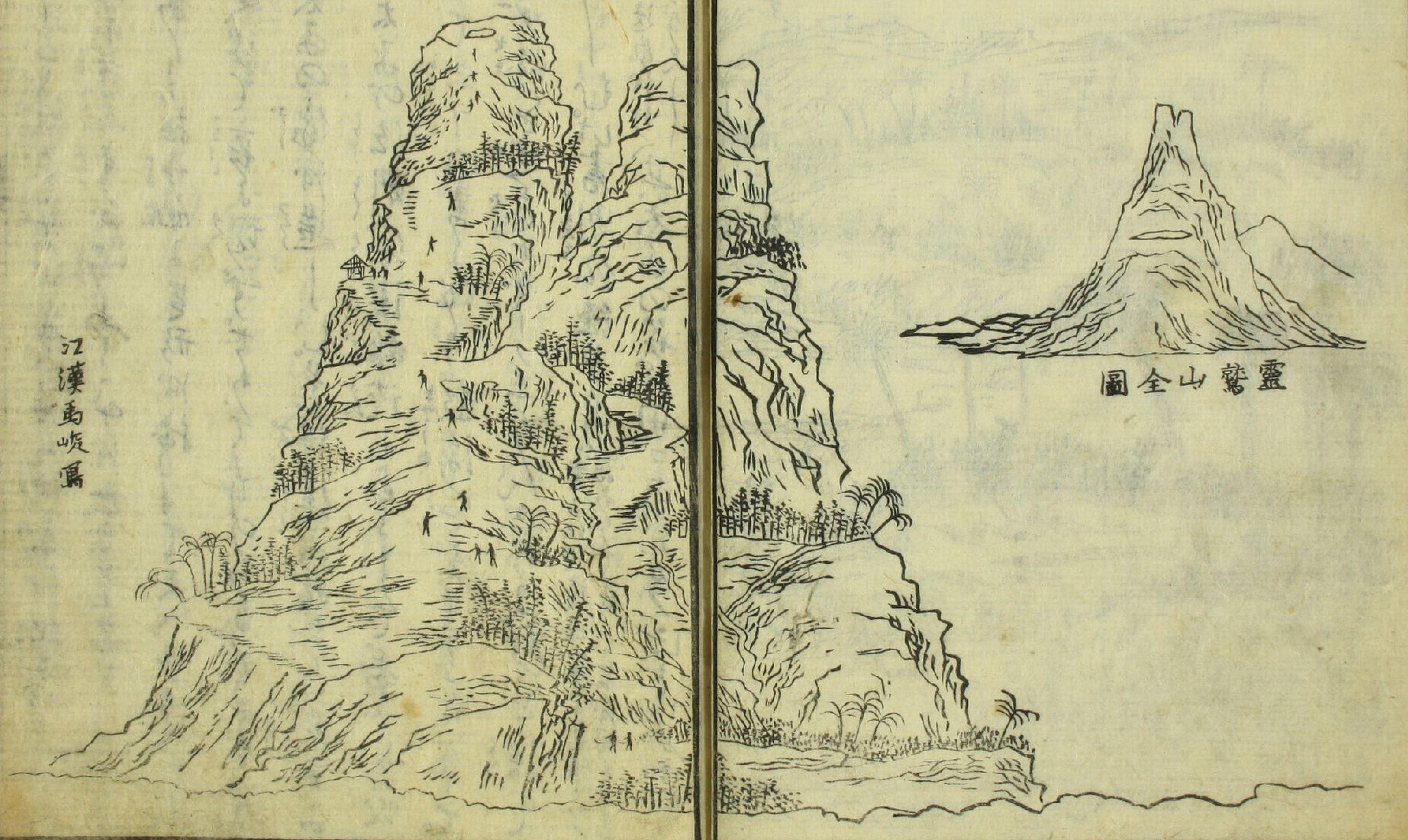
至るバかりし中の平地あり。其所ハ呼て「ハニヲヱル
レリパーテレ」といふ。右の方に一の小廟の如し。是ハ此
山の司る者。憩息の所なり。右の方に以前ハ荘厳なる
粟の堂有しと云。今ハなし。其中央に池あり。「空
ールレマルアカントン」といふ。八功徳池と云。俗に是を
「クルボク子」といふ。訳して子池と云事なり。妊娠
せざる婦人此水を服すれバ懐胎するといふよ
依てなり。然れども凡俗の者猥に汲む事を許さず。
修行の人に与へて。此水を汲ませしむ。此池の
辺に大石あり。石の面に仏の足跡あり。呼て

「ヱレリパアテレ」といふ。是釈迦の足跡にして吾邦薬師寺の仏足石と同物なり凡人の足
よりも甚大なりして。足形のあざやかなる事。あたかも
蝋に印を押するが如し。此山の行者群集
して恭敬礼拝す。此山小なれど昔ハ天竺国中の
人のこみあつまりて。巴尔斉亜国。支那。唐土のこと其外遠近
の地より参詣す。按に仏在世の頃仏道修行
する者多かりしに。此時東印帝亜に一王あり。
后懐胎の内に。星読の器を造らしむ。星読ハ訳語なり天文の学ある器なり製
し終る日太子降誕す。王悦んで曰。此子神聖
なるべしと察して是をなづくるに及んで神彩

頴悟にして日ましに随て聞知せずといふ事なし。幼少の比より。俗を厭ひ給ひけり。父王よりて宮中に一の宮殿を構へ。人世万事の有様を見聞せしめず。籠り居る事数年。十八歳の年。宮中を巡遊せんとて浄飯王に告して。数多の従者に警固せしめて遊覧し給ふ。太子始て道の傍辺に足なえの居るを見給ふ。従者に問て曰。彼は如何して如此なるや。又盲目となりて何も見えずして居るや。従者答て其天質なるが如し。又一人の老翁杖に縋りてよろぼひ来るを見て問。彼は如何して如此なるや。従者答て。人は年老ては。筋骨枯槁て皆かゝる姿となる事なりといふ。爰において太子初て驚き給ひ。行し死人は葬られて。浮人世安の轉変を観じ給ひ。忽ち俗の事を捨て一念発起し。たちまちに塵世を厭離して浄理に帰依し。独居の後。東印度を出て中天竺に至りましまし。徒弟を引率て陽春国に渡り。霊鷲山に有て法を説給ふ事数年。教化なりしとの事おふるしず。（唐去年洛陽北嵯峨清涼寺の什宝栴檀釈迦如来ハ西竺伝来の像伝記とえある釈迦出家の事しるせり小説ある僧と大小同じ）ましまし後太子化尊へ法を伝へんとする所

靈鷲山之圖

靈鷲山絶頂之圖



靈鷲山全圖

欲して。徒弟等に衆に向ひ。他をして起させしめんがために。昔名号を唱ふる事を教ゆ。是名号と称へる物なり。故に石面に其形を彫して天へ上る。父の王悲て宮に坐せず。其後をかなしみにたへずして彼太子の像を造らしむ。是仏像の始なり。其すゑ等太子の法則。言語。雑説に至るまで。悉く集成して若干の書となし。教諭とするものにして。其の徒を迷忘せざらしめんがために。経と称して唄へしむ。是則仏経なり。

○案ずるに仏経読誦の中に梵唄といふ物ありて悉く節を附けて是を唄ふの遺風を伝へしなるべし

其太子の名を「サゴモンバルカノニ」といふ。西洋の「ピユートン」と云人の説に云。出家得度の法の名を「ダラマラヤ」と云しとなり。故に仏足石の事。紅毛の「アポステルトーマス」が説に。是全く雁抱にして。錫蘭の石工が作りし所なり。此「アダムス」山中の事に附て種々の雑説あれども。皆仏法を主張する行者ども附会の妄説なりとぞ。此説は浄陽の西何来なる人。花蓮的印といふ地裏の土中より顕るる説の荒唐を論じたるは。席上みな咲をなさしめて譏りしなり。

○生別死別

彼邦の習ひにして生別にハ手を握り哀をいたせ。遠き国よりかへりてハ口吸などして別を惜む然しと。の深きうする者ハこれを偲びかそとなり。死別とハ心中にハ悲しみも多くあれど。面に憂ひの色を出さぬを是死ハ天命のなす所にして。歎くハ天への恐れなりとてなかるべしなり。

○紅毛人葬式

往年「コールコープ」といふ加比丹咬𠺕吧より日本へ渡海の洋中にて病死する。死骸を長崎稲佐山の悟真寺へ（是ハ紅毛人を葬る寺にて宗旨ハ禅なり）葬送しける。始末を玄沢子の物語にて

聞しに。先屍の腹を割て臓腑をとり出し塩をつめて其切口を縫合せ。（是其屍をして朽ちたゞれざらしめんが為なり。さて彼邦にて貴人などハかくのごとくするとなり。下の木乃伊の條にあり考へ見るべし）美き衣を着せて外棺に収め。（美き衣ハ彼邦の喪服なり。下に委しく載する）こくと詰其柩の上を瀝青にて塗固めて船中に安措し海の上に日数を経て後長崎へ着岸の上葬礼を行ひける時の式ハ棺へ黒天鵞絨の覆をかけ。棒ハ竪に二本横に二本入て。かつぐやうに作りたり。稲佐の悟真寺まで送りの蛮人数多。各黒き喪服を着し。黒き二尺の裁を作りたるをもって右の肩へ斜めにかけしものと着たり。葬穴を深く掘て柩を埋むること此邦にさし

てかける事なし。（中人の葬式も大抵此の如くなり）石碑ハ横石なり。
横文字にて銘を刻む。石面の一傍に砂時斗の形に
その翼を添たる紋を彫付たり。是ハ我邦の判事
物の極りなき事なり。砂時斗ハ機関の砂の落切たるを
もて呼吸の絶しことにたとへ。左右の翼ハ此人死し
ても名ハ千万里の外に飛行するよしを表すとぞ
彼邦の人譬喩を画にあらはす事多し。大抵此類の画組なり。
林子平が見たる加毘丹の葬式も。玄沢子の話と同じ。
輿舁の日庸二十人に阿蘭陀人の印の付たる着板を
着せしめ。柩をかつがせ見送りの蛮人。西洋館の表門より
稲佐の湊まで。十八丁の海上を船にて行。柩を乗せたる舟
に若添の加毘旦の舟へハ布文の旗を立たり。扨悟真寺
の僧并に枝舟に乗り。住僧おなじく法衣の寺僧の僧
従ひ出て讀経して送る。是迄ハ。すべて寺
の例によりする事なり。埋葬ハ和尚の引導なり。
紅毛の死人の耳へハ何とも通ふや。無縄がうして見たけら
りがねべし。

○紅毛喪服

喪服のるいを「ラアウケレイド」といふ。黒繻子にて製す。
仕立常の服にかはる事なし。扨て喪の式にハ。黒色の

男女喪に当る人のつねに着る衣服。「ラアウワーエル」といふ。指にハ製したる
書翰の封じめハ赤き色の「ラッカ」なるを
物に火にて溶し其の上へ印を押すなり。喪中の文
通にハ黒き「ラッカ」を用ゆ。忌服の日数ハ詳ならず。去る
以子の物語なり。先年東都にて。
孝恭院殿御逝去の節。参向の加比丹「アウレンド弁ルレンヘイト」
長崎屋の旅亭にありて。作出されし事ありける日より。
黒色の喪服を着し。身体に傍を加へず。御初七日迄
謹み居たり。七日の日ハ日本の風にならひたるにて
しハ彼国七曜を以て日に配すれバ七日にて一周なるが

由なるべし。国瑞法眼申されける。

○黒坊の葬式

林子平崎陽に遊事せし時。西洋館に出入せしかバ。天竺人の
葬送を見たり。崎陽にて言ふ所の黒坊なり 棺ハ松板にて拵へたる外抜
なり。是も出島より稲佐山へ荷ひて送る。同国の黒坊
惜むまで見送り出て寺僧の手に渡す。葬穴の前
にて死骸を引出し。赤裸にして口の内へ土を押込。
横さまに伏させおき。其身ハ「サロコ」といふ大衣の如く仕立
たる木綿の単物なる礼服を着し。是ハ何方も着る彼邦の服なり 手を組て
前に礼拝なし。横文字にて書たる経文を出

して（天竺にて今廿八梵字の序用ゆ「コレイス」の如く字の法あり）讀經にハ常にあるなり。殊勝なり。是より誦經終りて後、學者みな「アミン」と唱ふるを十遍。「アイノーハ」「ナイノーハ」と唱へ、すぐに左右の者なるを百遍にして、死者を埋るなり。蘭人の考に曰。土は口へ含まするハ、故ある事なり。西洋の人四元行と号して、水火土氣の四つを信じ、生氣水なる者信ずる者ハ、死ぬれバ土に葬し、火を信ずる者ハ火葬し、氣を信ずる者ハ、縄をもつて樹の枝にかく。土を尊信する者ハ土葬にす。（中良按ずるに釈氏要覧に曰、葬法天竺に有四焉、謂水葬火葬土葬林葬也と。此火葬之事、此文と相似たり）長崎に居る和蘭人の内にハ、火氣の

三つを信ずる者なれども、今ハ日本の制にしたがひて、ことごとく土葬にすることなりとぞ。中にも子平が知れる和蘭の土に押へて含ませるハ、土を信ずる者を葬る式にてやありけん。「アミン」と唱へるハ、阿弥陀といふなるべしと去春參向の蛮人「グウンラアドヨーナス」と云筆者のいひけるとなり。「アイノーハ」「ナイノーハ」の考なし。又玄沢子に問しに、某坊の葬禮ハ、いさゝかかはりしとぞ。死者にて、ことごとく沐浴せしめ、其上に木綿にて巻き、棺に收て葬るなり。（中良按ずるに、先ハ上に述たる四元行の内の一つを信ずる者ならんか。葬の式もそれぞれかくハ違ふべし）なる丈より堀りにて、ことも供じ、其の屍をまで左右の指のべし

の頭に在る〇。中良案に紅毛にて用ゆる求数遊華の印像なり額に押ある所の冊
三。經文は誦し終て「トワンアフ」と云て扨其經の
文は迷ふ事なく信びのえとり入事なるよし。「トワン」
は崇ふ敬ふ辞。「アフ」は鬼神の事なるべしとなり。「アフ」
の事いさゝか愚考あり下に載す。

〇海黄 并 花布の名

海黄のるいは紅毛にて「アルモセイン」といふ。榜葛剌國より
出る織物なり。かいきは榜葛剌の語なるや。亀土の書には
段機と載たるよし。いまだ詳ならず。皿紗は南應帝
亜の地。「スラタ」といふ國より出るとなり。紅毛にてハ
「セッツ」といふ。さらさといふハ「スラタ」の轉語なるべしと
阿蘭陀の說なり。

〇木乃伊

亜弗利加洲の内「ヨルハリヤ」といふ國より「子ーゴロス」といふ
沙金は多く産する國へ利欲にかける者。命を捨て
遠く商ひに行。路の日数は計るに九十六箇月あまりなり。其
内廣原の沙地は行こと二箇月なりとぞ。此地炎熱にして
人屋水泉なく。道路の夫と定め據べきものなし。
実に天下第一の難路なり。此間は往来の商客。黨を
かたらふこと二三百人。沙漠は行ところの糧米並行器の數。

其外要用の雑具等を。委く是を備へて駝に負はせ。昼ハ日輪の出没を見て方位を知り。夜ハ星辰の運行に依て方角を定めつゝ。そこをもつてしるべとしてゆくなり。此沙地を往者の大に恐るゝハ東風の吹なり。此風殊に烈しけれバ熱沙虚空に飛て満々たり。行人是よりその忽ち遠方に迷ひ。進退度を失ふ。此時に當て熱沙来りて面をうち。沙石眼耳に入充て。ことごとく死に至ることのみし。其屍数多の中に埋れ骨肉燥焦て。あるいは不朽過炭のごとし。又時ありて大風起り吹埋めしか沙石を吹ちらせバ。彼屍を上小墓ふ。行人たやすく

是を取て甚尊きとし。此物則木乃伊なりと。彼邦の旧説に云傳へたるよしなり。其より後。精数ある蛮書の説に曰。阨入多國の内。「アレキサンデリヤ」と云所あり。此地ハ富豊饒にして人民殊に至孝なり。人死すれバ其腸を抜去て。これにかうある種々の薬品を以注し。布帛をもて屍に纏ひ。是を浸すに上好の脂油をもつて製したる薬汁を以てす。棺に納めて窖の中に埋む。是其死骸をして千歳朽損じざらしめんがためなり。〇上に記る和蘭人葬送の條にあはせ考ふべし 此屍年月を歴れバ上等の薬となる。是則木乃伊なり。去によりて土人等是を發て掘換りて。人も同じく古墳を

木乃伊全形之圖

あざむき。拔け出て其屍を得。交易して善價を得と
蠻語にてハ「モミイ」といふ。唐土にて木乃伊と書ハ音訳
なり。ミイラといふハ日本の俗云なり。尚年久く參商せる

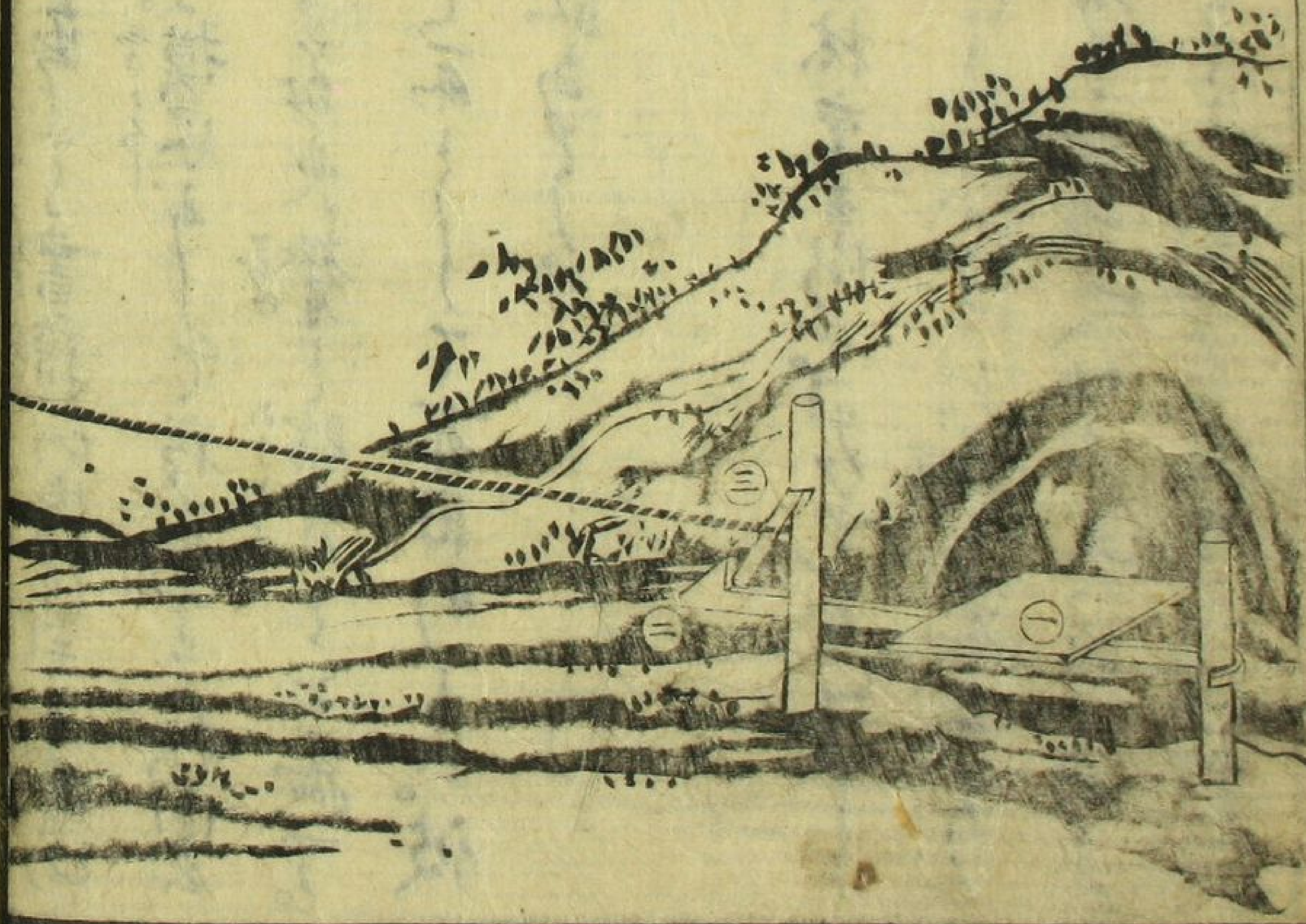
加児旦「ロンベルゲ」が。舶来せる書籍の内に。「モミイ」の
全形を画したるを得て摸写なして右に出せり。杉田玄
白子ハ頭顱骨を蔵せり。予が家にハ脊と膝骨とを蔵す。
其形いさゝかも欠損せず。肉として布目あるハ。彼
尸をまといたる布の跡なり。

○鉄炮猿

たゞみ写す画図ハ訳官楢林重兵衛が「テッチンギ」と名より
申しうけたる「ゴヨメール」といふ書に載る所なり。
猯狸のたぐひの穴に竜り居る穴の口へ仕掛を又ハれ無ふ
路筋の林の方などへ仕かけ置ても出せり。此書全

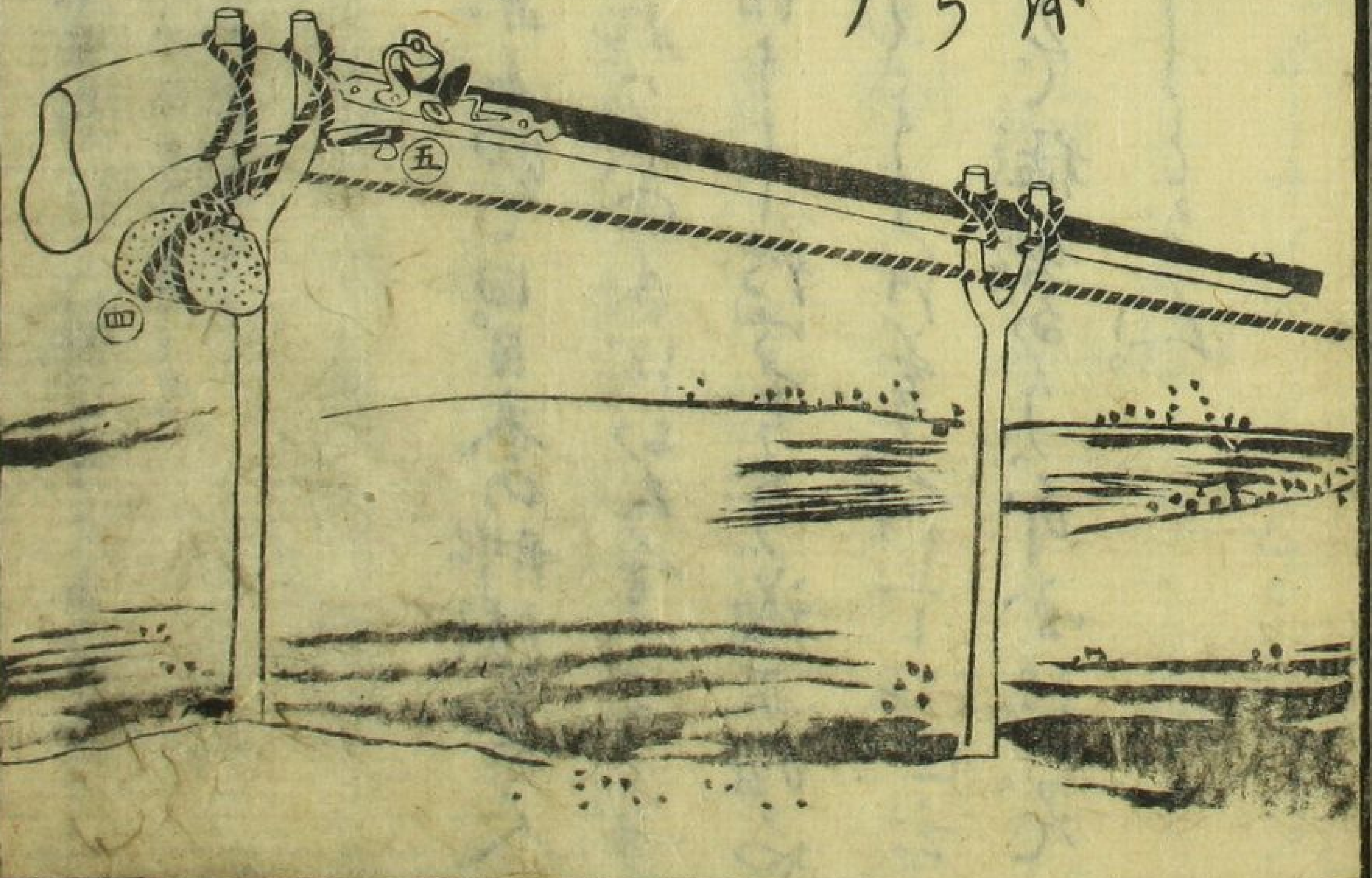
鉄鉋弶之圖

㊀叶板へ足を踏かくる
㊁横木おちる
㊂栓(せん)はづれる
㊃錘(おもり)の石おちる
㊄引金ひける



紅毛の鳥銃(ろうがう)ハ火縄を
用ひず火燧(ひうち)にてうち
つくる也りぬ縦り
よることのなり

中良写



部七巻あり。実に古今の大奇書にして漏さりと云ふべし。

栖林九皐（号）が家兄の紅毛学を好むの余り蔵して
其何層を記せし時日本国中に只一部の書なり

○切腹の事

「キユーレル」といへる蛮人。西洋来りて曰。日本の刑法に士人罪を犯しける時死に臨ければ。人の手にかゝらずして。自匕首（えんとう）を以て腹を切り往生せり。誠に然るや否や。何素如の備なくざるよしや若ふ。「キユーレル」言ひ出て曰。日本の人気かくまで猛烈なり。我国には中々もせざるなりと云しとなん。

○ボーチーの病症

玄沢云ふ。近来彼国の人「ボーチイ」といふ病を患ふ。是百年以来の流行病なりといふ。膝より下痛みて腫あり。或は身の所もあり。終に衝心して死に至る。此症暖衣美食して。身の運動少なき貴人にあるよしなり。出行に逗留せる蛮人の内。船頭加毘丹なるとなるも。八発せで。船働の「マタロス」（下人）の事など八絶て此病なし。十方にいふ脚気衝心の症に似よりしもなん。今年わたりし「ロンベルゲ」長崎屋に滞留の内此病にかゝる。一ツ向に人事を弁へず。譫語なども言ひなせり。鈍刀を以て。脚底を切ぬくが如く。その痛を堪難しとぞ。

○男色の制禁

彼邦男色を禁ずる事甚厳密なり。是人理にそむく故なりとて。当時にても犯をなすものあり。其犯せし人ハ火刑に処せられ。犯されたる少年ハ。海へ沈められしとなん。今も然るよし今年の筆者「リカルト」が云しとぞ

○アンペラ

玄沢子曰。アンペラハ何国の語なるやさだかならず。唐山にて作る所の物ハ「テカルレイナ」といふ。「テカル」とハ算崩しの組なるとのことなり。

○瓜哇の風土

瓜哇ハ日本の九州程もあるべし。「ジヤカタラ」ともいふ。又咬𠺕吧と称するハ。初紅毛人此国へ来りし時。土人に向ひて。彼ハ何といふぞと問けるに。土語通ぜざる土人等。其処に生繁りたる椰子の樹の事を問事と心得て「カラツパア」と答へけるが。蛮人ハ其の名を云けると思ひてそれより「カラツパア」と唱へ伝へたり。夫より後此国を呼にもかくいひならはしけれバ。本名ハ「ジヤワ」又「ジヤカタラ」といふ名を改めし所ハ実の土名なり。此番語にハ甚遠ひて云事なりける「カラツパア」とも唱へると云。「カラツパ」とハ椰子の事なり。此州をもじりて建

よりくる国に多く此木あり。瓜哇ハ国中ニ山なく年中温暖の地なり。平日小雨そゝぎありて。時として出水のうれひあり。紅毛人の居住せる所ハ郭を構へ其周に唐山「イギリス」應帝亜を初諸国の人の旅宿所似る。世界第一の大港にして数小船ちかよる商船ハ無数といふべし。甚繁華なる由なり。土人の居坊どもハ大抵溝渠に添て居るところなり。船の往来多し。是ハ黒奴の牛車ニ負する者。衢に出て労役をなすが為なり。蛮人もはじめて此地ニ来る者。環ニ病の為ニ歿せぬ。今にても粥をすゝる替てやしつて飲ひ。漸くに此地の水ニ服して後。唐人ハ此理を解せざる者あるかや。一概に飲食ハする故日あらずして病を発し。死ニいたるもの多しとなん。其後へ来る紅毛の蛮人唐人も甚めくなりしとぞ。此国の事次の巻の初。海路の記の條ニ再載せり。椰子の木の形チハ。吳鸞山の図に画せる。棕櫚の樹のごとき物なり。

紅毛雜話卷之二